

キリスト教文藝

第三十七輯

芥川龍之介「きりしとほろ上人伝」論

——芥川文芸における切支丹もの意義——

細川 正義 …… 1

遠藤周作「王の挽歌」論

——歴史に内在する人生の「痕跡」——

古浦 修子 …… 28

芥川龍之介「糸女覚え書」にみる細川ガラシヤの信仰

——キリシタン史料との比較を通して——

香川 雅子 …… 45

三浦綾子「細川ガラシヤ夫人」論

——「歴史小説」・「評伝」・「信仰」——

長濱 拓磨 …… 69

遠藤周作「日本の聖女」論

——私の語る（細川ガラシヤ）とその信仰——

長原しのぶ …… 85

ロープシン「蒼ざめた馬」におけるキリスト教倫理の問題

——「愛」と「殺人」のアンビヴァレンス——

松山 猷 …… (1)

チャールズ・ディケンズ「エドウィン・ドルードの謎」における罪と救い

——比喩としての大聖堂——

永岡規伊子 …… (14)

チャールズ・ディケンズ 『エドウィン・ドルードの謎』 における罪と救い

——比喩としての大聖堂——

永岡規伊子

未完の遺作となったチャールズ・ディケンズ『エドウィン・ドルードの謎』(The Mystery of Edwin Drood 1870)は、物語の後半がタイトルの通り「謎」となり、今日に至るまで夥しい数の謎解きの試みが行われてきた⁽¹⁾。その主な論点は、失踪した人物エドウィン・ドルードは実際に殺されたのか、探偵の役割を担うと考えられる謎の人物ディック・ダチェリーは誰か、そして阿片窟の女主人の正体についてなどである。

ディケンズはそれまでも『バーナビー・ラッジ (Barnaby Rudge 1841)』で殺人事件の解明を読者に投げかけ、『荒涼館 (Bleak House 1852)』において探偵役のパケット警部を配置するなど、多くの作品で謎解きを重要なプロット展開の軸として用いてきた。そのように「誰が犯人か」の解明に主眼を置いたり、『オリバー・トゥイスト (Oliver Twist 1837)』のサイクスや『マーティン・チャズルウィット (Martin Chuzzlewit 1843)』のジョーナスのように殺人後の恐怖心を描くもの、そして前期に書かれた短編の「ある狂人の手記」や「チャールズ二世の時代に獄中で発見された告白書」⁽²⁾、あるいは完成した最後の小説『互いの友 (Our Mutual Friend 1864)』のブラッドリー・ヘッドストーンのように、謎解きよりも犯罪に至る異常な心理の描写を中心に置くものもあった。

ディケンズが最後に手掛けた『エドウィン・ドルードの謎』は、そのような謎解きの手法と人間心理の追求といったミステリーの要素がすべて取り入

れられており、とりわけ大聖堂の聖歌隊長ジョン・ジャスパーが、それまでの犯人像のようなステレオタイプ化された悪漢ではなく、苦悩を背負った人間が悪魔的な犯罪に堕ちていく姿として描かれている。そしてネヴィルという人物の罪意識の描写も交えて、人間の根源的な罪と悪が小説の中心テーマとなっていることから、ディケンズ文学の到達点として重要な作品と位置づけることができる。ミステリーというジャンルが確立していない19世紀中葉において、それは画期的な手法であり、人間の不条理と心の闇を描く現代小説を先取りするものであったと考えられるだろう。

自身の生きた時代をパノラマ的に活写し、社会悪を訴え続けたディケンズが、このように個人の内面に深く分け入って、殺人心理という題材を小説の中心に置いたのはなぜか。本稿では、その舞台がイギリス国教会の大聖堂であることに注目し、この作品に提示された罪の問題が、それまでの作品で多く扱われてきた社会的・道徳的な次元から、キリスト教の罪の概念へと深まりを増して描かれていることを明らかにし、小説世界における救いの問題と大聖堂が象徴する死と復活について考察したい。

1. 大聖堂とアヘン窟

この小説は、ディケンズの心の故郷であるロチェスターをモデルとするクロイスタラムという田舎町を舞台としている。その名がいにしへの修道院や隔離された場所を思わせるように、この「歴史の古い町、宗教の町」(331)は「沈滞し、変化はすべて過去に存し、未来には絶対やってこない」。「大聖堂の地下室から湧いて来る土くさい香りが、町中にみなぎっていて」「歴代の聖職者の墓の遺跡が町全体にひろがって」(40)、死が覆う町として描かれる。

そのような町の「大聖堂で大いに尊敬され」、「聖歌隊にすばらしい奇蹟をもたらしたという名声を博している」(32) ジャスパーは、甥のエドウィンとの会話で自身の内面を次のように打ち明ける。

「わたしの生活の耐え難い単調さのお陰で、わたしはじりじりとむしばまれていくのだ。わたしたち聖歌隊の行くおつとめを聞いてどう思うかね」

「神々しい。まるで天使の歌声だ」

「わたしには悪魔の声のように思えることが、たびたびあるのさ。わたしはすっかりうんざりしているんだ！・・・わたし以前にもあの陰気な場所で人生をすり減らしていったみじめな僧侶はいただろうが、わたしほどにうんざりした者はいるはずないさ。彼らは聖歌隊席の柱や椅子や机に悪魔の彫り物をして、気をまぎらわすことができたのだからな。わたしはどうしたらいいっていうんだ。自分の心臓で悪魔の彫り物でも作ればいいのか」(32-33)

小説冒頭の阿片によるジャスパーの幻覚の中では、阿片窟のベッドのポール越しに大聖堂の石造りの塔が見え、聖と俗の対照をなすはずの大聖堂の町とロンドンの暗黒街⁹⁾には隔たりがないことを暗示している。「僅かな数の信者たちが三々五々やってくる」(429) 大聖堂の礼拝では、「汚れた聖衣」(15) を着た聖歌隊が空しく美声を響かせる。「しゃがれ声の大聖堂の鐘の音が聞こえ、しゃがれ声の鴉どもが大聖堂の塔のまわりに群れ集まり、もっとしゃがれ声で、あまり正体のはっきりしない鴉どもが、塔のずっと下の聖職者席に群がる」だけで、「宗教的な思考が雑然として町民の頭の中にまぎれ込んでいる」(40) に過ぎない。国教会の伝統と権威が廃頽し、信仰共同体という生きた交わりを失った時代にあつて、「しゃがれ声」の老人と比喻される大聖堂は死の様相を示すのである。「ここでは架空の名前をつけておく」(38) と作者がわざわざ断ったのは、クロイスタラムがイギリスのどこにもある町であることを示唆するためであろう。

まだ26歳の若者であるジャスパーは、この形骸化した宗教の町で、自らの心に巢食う空虚さと悪の存在に向き合わざるを得ない。彼は「哀れで変わり映えのしない聖歌隊指揮者、あくせく働く音楽家」として「その地位に安

住して」いても、「ある種のはかない野心で心が乱される」という。それは、「野心というか、憧れというか、不安というか、不満と言うか、なんといいたらいいか」(34)、自分でも捉えることができない感情であることを告白する。阿片窟でジャスパーが繰り返す「訳がわからない (unintelligible)」(14, 15, 416) という言葉は自己の存在の不確かさを示している。この意識下に抑圧された感情は、甥エドウィン・ドルードへの一方的な愛着とその許嫁ローザ・パッドへの歪んだ執着となって噴出し、エジプトでの仕事とローザとの結婚という未来が開けたエドウィンへの嫉妬心となって燃え上がるのである。

一方でジャスパーと5、6歳しか違わない甥のエドウィンもまた、人知れず不満を抱えていた。同じ場面でジャスパーに対して彼は次のように打ち明ける。

「ぼくの死んだ父親と、プッシー（ローザの愛称：筆者）の父親とは、どうしても僕たちを結婚させる手筈を、あらかじめ整えておかないと気がすまない。一体全体なぜ・・・ぼくたちを放っておいてくれなかったんだ」。「ジャック（ジャスパーの愛称：筆者）、あんたの一生は測量士の地図みたいに、一寸一分狂いなしにきちっと定められてはいないんだからね。あんたは自分で選ぶことができるんだ。あんたにとって人生は自然に熟れたつややかなスモモなんだ」(30)

第二章のこの場面では、相手の自由さを互いに羨み、実際には閉塞感のうちに歩んでいる他人の人生を思いやることはなく、ましてや理解し合うこともない。エドウィンはジャスパーの心を読み取れず、「将来の警告として聞きたまえ」(35) という殺害予告ともとれる言葉を理解できない。一方ジャスパーは殺害の第一の動機となる嫉妬が的外れなものであり、エドウィンとローザの関係が変化しつつあることを見抜くことはできないのである。

このように、沈滞した大聖堂の町では人々の心もまた行き場を失って荒廃

している。ジャスパーは阿片窟の女主人に「生きるのが我慢できなくなると、救いを求めてここに來たんだ。そして救いは手に入れた。たった一つの、たった一つの救いだった！」と「狼の唸り声のような声で繰り返す」(414)。救いを与え、未来に開けているはずの大聖堂はもはやなく、そこを逃れてロンドンの阿片窟へと救いを求めて足を運ぶジャスパーは、きわめて人間的な弱さを抱えた人間なのだ。

2. ジャスパーの犯罪

このようなジャスパーがあたかも礼拝堂で罪を告白するかのよう、阿片窟の女主人に打ち明けるのは、幻覚のうちに繰り返す心の中の殺人である。彼は阿片に耽り、「何万回、いや、そうじゃない。何億回と」「同じ旅」をしてきたという。女がそれを「楽しい思い」であったかと尋ねると、「ああ」と答える(412-413)。ジャスパーは、この殺人による快楽を幻覚の中にとどめ、現実の生活とかがうじてバランスを取っていたと言える。

しかし、博愛協会の世話で聖堂小参事会員クリスパークル氏に預けられた青年ネヴィルの登場で、願望を解き放った幻想の上での甥殺しは現実性を帯びてくる。双子の孤児ランドレス兄妹がセイロンからクロイスタラムに到着した日に、兄ネヴィル・ランドレスは一目惚れしたローザに対するエドウィンの態度に反発を感じ、反対にエドウィンはネヴィルから受けた冷やかな態度に腹を立てる。その二人の仲たがいを即座に悟ったジャスパーは二人を家に招いて互いの憎悪を焚きつけ、さらにワインに何かを混ぜる仕草が仄めかされて、二人は酩酊した結果、ネヴィルがエドウィンに対して暴力をふるってしまう。この時にジャスパーの殺害計画が完成したと言えるだろう。自分と同じ野獣のような凶暴性や復讐心をネヴィルの中に見たジャスパーは、ネヴィルを犯人に仕立てる筋書きに基づいて殺人を実行することになるのである。

ジャスパーはクリスマスイブの嵐の夜、クリスパークル氏の計らいもあ

り、ネヴィルとエドウィンとを仲直りさせる目的で彼の住まいである門番小屋に二人を再び呼び寄せる。ジャスパーの心象を表す嵐が時間そのものを消し去ったと評されるように⁽⁴⁾、その夜のことは一切語られず、嵐が収まった翌朝、エドウィンが失踪しネヴィルに嫌疑がかけられていることが読者に知らされることになる。

この殺害の瞬間を、後にジャスパーは阿片窟の女主人にこのように告白する。

「実際にやった時には、あんまり早く終わってしまったので、拍子抜けしたみたいだった。……とうとうそれが実際に起こったときには、あんまりあっけなかつたので、初めのうちは夢かと思った。……しっ！旅が終わった。おしまいだ。……あれを見ろ！見ろ！何てみともない、哀れな、みじめな姿なんだ！あれはほんものに違いない。おしまいだ！」(415-6)

夢の方が現実感があり、現実が夢のようであることは誰しも経験することである。この描写には、シェイクスピアの悲劇にも似て運命に導かれた殺人の感があり、殺人があったとされる第14章のタイトル「この三人いつまた会うだろうか」に『マクベス』のセリフが重ねられているとよく指摘される⁽⁵⁾。そしてまた、博愛協会会長ハニーサンダー氏が「流血！アベル！カイン！わしはカインとは手を組めんぞ」(303)と叫ぶように、旧約聖書で初めての殺人となる兄弟殺しのイメージが重ねられて、ジャスパーは「良き兄弟（自分自身の良心と呼ぶ人もいるが）を殺すことによって罪の荒野に追われ、神から追放される」⁽⁶⁾のである。

3. 謎解きの仕掛け

この場面までに、ジャスパーの犯行を推測させる伏線として作者は次のよ

うなエピソードを用意していた。一つは、大聖堂の地下納骨堂について熟知する墓石の石工職人ダードルズとジャスパーの接点である。当時、生石灰はものを融かすと信じられていたが、ダードルズは「少し掻き回せば、骨だって食って融かしちまうぜ」(215)という生石灰が置いてある場所をジャスパーに教える。ダードルズが地下納骨堂の鍵を預かっていることを知ったジャスパーは、彼を夜の大聖堂の探検に誘い、酒で酔いつぶれさせる。ダードルズが眠っている間のジャスパーの行動は読者には語られないが、生石灰を「庭の門の小山」(215)から運び出し、大聖堂地下でエドウィンを殺害して埋める手はずを整えていたという推理を可能にするのである。

この殺人の場が大聖堂の地下に設定されていることは、のちに述べる大聖堂の象徴性を考えると意味深い。犯罪の発覚という意味では、デピュティがその現場を覗き見ていたという、よくなされる推理は正しいだろう。しかし、この物語には犯罪の解明と同時に人間の罪の裁きが二重になって描かれており、大聖堂は神の正義が明らかにされ、罪の裁きと赦しが現わされる場であるからだ。

一方、エドウィンがクリスマスイブの朝に、懐中時計の時刻を合わせてもらうために宝石商に立ち寄るエピソードでは、「先日ジャスパーさまがお見えになりましたね。・・・自分は親戚の殿方(エドウィンのこと：筆者)が持っている宝石類は全部そらで覚えている、すなわち鎖つきの懐中時計とシャツピンさ、とおっしゃいましたね」(258)と宝石商に証言させている。これは、貴金属が生石灰で溶けないために、死体を遺棄する前にあらかじめ奪っておく必要があることをジャスパーが知っていたと読者に推理させる仕掛けなのだ。

しかし、ジャスパーが知らない別のエピソードが同時進行していることが読者に語られる。エドウィンは「ルビーとダイヤモンドが、金の中に巧みにはめ込まれたバラの花の指輪」(202)を前日に受け取って持っていたのである。それは、ローザの後見人グルージャスが、若くして水死したローザの母親の形見として預かっていたもので、本当の愛情によって結婚をするのな

ら、その時にエドウィンからローザに手渡すようにと託されたのであった。しかし、ローザとエドウィンは互いの気持ちを打ち明け合って、結婚をしない決断をする。そのため指輪は渡されず、エドウィンの胸ポケットに入れたままになって、後半で描かれるであろう生石灰を使った完全犯罪の綻びを予測させるのである。

4. ジャスパーの悪の本質

二人が結婚しないというこの事実を、エドウィン失踪後(あるいは殺害後)にグルージャスから聞いたジャスパーは、次のように描写される。

グルージャス氏は恐ろしい悲鳴を聞いた。もはや蒼白な姿が立っているのも、坐っているのも見えない。床の上に泥にまみれた、ぼろぼろの着物の塊が見えるだけだった。(283)

このように崩れ落ち、意識を失うのは、「辛い、危険な旅だった」(412)と告白する甥殺しが無意味であったことを知ったためであるが、「着物の塊」となり果てたと比喩されるジャスパーの姿は、この犯罪がいかにか自己の存在を賭したものであったかを物語り、さらにはそこに神の裁きによる死を読み取ることもできるだろう。

その後、エドウィン失踪論で収まりつつあった世間の見方が、川に投げ捨てられていた懐中時計とシャツピンの発見によって、ネヴィルへの疑いが再燃すると、ジャスパーはネヴィルへの悪魔的な追跡を再開する。クリスパーク氏に見せた自分の日記に次のように宣言するのである。

「私の愛する甥は殺害されたのだ。・・・今後わたしは秘密の捜索の手をゆるめまい。愛する甥殺害の罪をその犯人にかぶせよう。そしてわたしは犯人を抹殺すべく献身しよう」(299)

さらに、殺人の第一の目的であったローザへの求婚は「邪悪な脅迫の表情」(343)で次のような言葉で行われ、ジャスパーの悪の正体が明らかにされる。

「昼間、いやな仕事をしている間も、夜、汚らしい現実にあざけり笑われながら、私が突入した幻想の世界の天国と地獄を、腕にあなたのおもかげを抱いてさまよいながら、みじめな気持ちで眠られぬ間も、私はあなたを狂ったように愛していたのです」(344)

そして、屈辱と恐怖と怒りに燃えるローザに、「ああ、何と美しい！あなたは落ち着いている時よりも、怒った時の方がもっと美しい。……あなた自身とあなたの憎悪を、あなた自身とあなたのかわいい激怒を、あなた自身とあなたの魅力的な軽蔑を、私に下さい」(345)と迫る。そして、ローザが結婚に応じなければ、「わたしとあなたの間を割くような第二の邪魔者を喜んで抹殺し」(347)、ネヴィルをエドウィン殺しの犯人として追い詰める脅迫する。そして、

「かりにもしあなたがわたしを棄てたって——そんなことはしないだろうね——わたしから逃げられないんだよ。誰もほくたちの邪魔をさせないから。わたしはあなたを死ぬまで追いかけるから」(350)

という言葉通り、ロンドンに逃れたネヴィルとローザの後をつけ狙い、後半の書かれなかった事件解明を待つことになるのである。

このようなジャスパーが妄想の中で育んだローザへの歪んだ愛は、エドウィンに対する溺愛と呼んでいたものと同じである。彼のエドウィンへの「激しい情熱の眼差し——飢えたような、押しつけがましい、警戒心にあふれた、しかし献身的な愛情のこもった眼差し——が、彼の顔に見られるのだ……絶対にその眼差しが散らばることはない。いつでもある一点に集中

している」(24)という。そして、「青年を見つめている眼差しはじっと一点に集中しているけれども、不思議なことに突然暖炉棚の上の肖像をも一緒に見つめることができるのだ」(25)と語られる。「暖炉棚の上の肖像」はエドウィンが戯れに描いたローザの絵で、ジャスパーはエドウィンとローザを重ねて見ていることを意味する。

「わたしの日記はネッド（エドウィンの愛称：筆者）の日記でもあるんです」(179)とクリスパークル師に話すように、ジャスパーの愛はエドウィン、そして同時にローザを思いのままに操り、乗っ取り、拘束するもので、「一点に集中している」視線は自分の心に向けられたものに他ならない。彼の愛は他者に向かうことはなく、自己の中に焦点が結ばれる自己愛なのである。

5. 悪に対抗する力

そのようなジャスパーの魔の手からローザとネヴィルを救う役割を担うのは、大聖堂の聖職者クリスパークル氏と、ローザがジャスパーから身を隠すために頼って行った後見人で法律事務所のグルージャス、そしてクリスパークル氏の学校時代の後輩で退役海軍士官のターターである。

ターターはおそらく小説後半で活躍するはずの人物で前半にはあまり登場しないが、グルージャスは謎の解明に向けて物事を見通す立場に置かれている。そして何よりも彼の経歴として仄めかされるように、昔ローザの母親を愛しながらも彼の親友との結婚を祝福し、その愛を秘めて娘のローザを守り続ける。その行為は福音書の「隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27)というキリスト教の最もよく知られた、しかし最も成すのが難しい教えの実践であり、ジャスパーのナルシズムに対抗する人物として対峙されている。

そして、追い詰められた二人を救うもう一人の人物として配置されるのが、ディケンズが好意的に描いた数少ない聖職者のうちの一人であるクリス

パークル氏である。彼は退廃した町の空気から唯一人逃れ、「幸福な静寂の空気がみなぎり……憐れみと寛容の源泉が生み出される」(88) 家に住んでいる。水泳、ボクシングの真似事などで体を鍛え、「健康そうで爽快な」(86)、筋肉的キリスト教 (Muscular Christianity) と呼ばれた当時の運動を彷彿とさせる聖職者として描かれ⁽⁷⁾、この小説世界の価値を示す重要な人物となっていく。

先に述べたように、クリスパークル氏は博愛協会から素行の悪いネヴィル・ランドレスの教育を依頼されていた。ネヴィルは、母親の死後、継父から虐待を受けて育ったため、「憎悪」「復讐心」「卑屈さ」を持ち、「情緒とか、思い出とか、生まれながらの善性とか……全然知らない」と自らを評するが、クリスパークル氏は彼の善性を信じ、ジャスパーや町の人々の嫌疑が守ろうとするのである。ネヴィルがエドウィンに対して癩癩を起し、暴力に至ったことをクリスパークル氏に許しを乞う場面では、「ぼくが許すなんて、とんでもないことさ。許してくれるお方は誰なのか、想像しうる限りの最高の存在とは誰なのか、君だって知っているだろう」(175) と答え、神の愛と赦しを説く。二人の出自については前半ではセイロンから来たということだけしか語られず、植民地伝道によってキリスト教に触れていたのかどうかはわからないが、妹のヘレナが、「ネヴィル、今からでも先生の教えに従いなさいな……天国に行きつけるまで」(174) とつぶやくように、兄妹がこの後キリスト教の感化を受けていくだろうことは確かである。

そして、プロット展開の上でクリスパークル氏が大きな役割を果たすが、先に述べたようにエドウィンの身に着けていた時計とシャツピンを、川の中の、見つかるはずのない場所で発見することである。この発見は、これまで、ジャスパーの持つ催眠術の力に導かれたものと解釈されることもあった⁽⁸⁾。しかし、夕方の散歩の途中で我知らず堰の近くに来ていたクリスパークル氏は次のように描かれる。

彼が立ち止まると、最初にこう考えた。「どんな風にしてぼくはここに

来てしまったのだろう！」次にこう考えた。「なぜぼくはここに来てしまったのだろう」

それからじっと水音を耳を澄ました。自分が読んだ本の中で、よく憶えている一句、空気の舌が人の名を口ずさむという一句が突然耳元に浮んで来たので、まるでその舌が形あるものであるかのように、彼は手でそれを耳からもぎ取った。(291)

その「一句」はミルトンの仮面劇『コーマス』の一節で、弟とはぐれて、魔術を使うコーマスが住む森に迷い込んだ一人のレディが「人の名を綴る無形の舌」に惑わされそうになる。しかし「良心」という勇士と「信仰」と「守護の天使」と「希望」を信じる、と戯曲は続いていく⁽⁹⁾。

クリスパークル氏もまた、次のように理性を持って何が示されているのかを吟味する。

心の中で筋道をたてて考えてみた。それはなんだろう。それはどこにあるのだろう。テストにかけてみる。五官のうちのどれにかけたらいいか。五官のうちのどれも、特に異常なしと報告して来た。もう一度耳を澄ました。堰から流れ落ちて、寒い星月夜の空の下、いつものように響いている水音を、再び彼の聴覚がとらえた。(292)

そして、夜が明けた次の日に、その場所で金時計とシャツピンの発見に至る。この奇跡的な発見は、明らかにジャスパーの力の及ばない出来事であり、むしろ神の啓示を示すものではないか。そのために、明晰さ (clarity) と活気 (sparkle) という意味の名前が与えられたクリスパークル氏を発見者としたと考えられるのである⁽¹⁰⁾。

6. 象徴としての大聖堂：3つの様相

この小説の中心のストーリーは悪魔的なジャスパーの犯罪とその解明であるが、以上に述べてきたように、彼の殺人に至る動機と犯罪心理がそれまでになく複雑で深みを帯びた分析によって描かれていて、それが人間の罪のテーマと重ねられていることがわかる。そして聖職者クリスパークル氏には、犯人解明につながる発見と、ジャスパーに似た気質を持つネヴィルの心の救済という二重の役割が与えられている。

最初に述べたように、19世紀の都市化と近代化によって人々の精神的な支柱となるべき教会の衰退があり、この小説の舞台として設定された田舎町の大聖堂も人々の救いの場とはならない。その中で、クリスパークル氏という新しい時代の聖職者と、隣人愛を体現する人物であるグルージャスが、この小説世界の救済の希望となっていることは明らかである。

そして、あたかも人格を持つかのように老人のイメージで描かれてきた大聖堂の描き方が、物語の進行とともに変化してくることに気づかされる。

まず、事件の前にグルージャスがジャスパーを訪ねて大聖堂の扉に立った時の描写は次のようである。

時の老人（大聖堂の比喩：筆者）は墓やアーチや地下室から、かびくさい溜息を吐き出していた。重苦しい暗闇が隅のほうで深まりはじめ、石の緑の苔から湿気が立ちのぼりはじめ、夕日がステンドグラスを通して本堂の床の上にちりばめていた宝石が、消えはじめていた。……

戸外の自由な空気の中では、河が、緑の牧場が、茶色い耕作地が、豊かな丘や谷が、夕日で赤々と染まっていた。遠くの風車小屋や農家の小さい窓が、輝く金箔の板のようにきらきらと光っていた。大聖堂の中では、すべてが灰色で陰気で、不気味で、途切れ途切れの単調なつぶやきが、まるで死にかけた人の声のように続き、突然オルガンと合唱隊の声

が響きわたると、音楽の大海の中にかき消されてしまった。と、大海が引き、死にかけた人の声が哀れな努力をした。またもや大海が高く押し寄せ、生きものを抹殺し、天井をたたき、アーチの間に満ち満ち、大塔の天辺にまで突き刺さった。と、大海がひき、すべてが沈黙となった。
(153)

周囲の自然が夕日で染まり生のきらめきを放っているのと対照的に、大聖堂だけが澱んだ光の届かない暗闇の場所として死のイメージで描かれている。「途切れ途切れの単調なつぶやき」は夕べの礼拝の祈りの声を指し、消え入りそうで形ばかりの祈りの実態を示しているだろう。そしてまた聖歌隊の歌声も合唱の美しさだけを追求し、祈りの声と調和することはない。むしろそれを大海の嵐のようにかき消してしまう様子は、先に引用したように、エドウィンには「天使の歌声」に聞こえるのに対して、聖歌隊長のジャスパーは「悪魔の声」に聞こえると言い当てるのである。

しかし、クリスマスイブの朝の場面では大聖堂について小説の語り手が次のように述べる。

（クロイスタラムに昔住んでいた人々の中に、）ずっと遠くの場所で死んだ者もいたが、その臨終の時、自分の部屋の床に大聖堂の庭のにれの木の秋の落葉がいっばいに散っている気がしたという。幼いころの印象に刻みつけられた葉ずれの音や爽やかな匂いが、人間の一生の円環がほぼ完結しかかって、始まりと終りが近づいて来た時に、またよみがえってきたのだ。(248)

老人たちにとって、幼いころの大聖堂は懐かしい思い出となって、死が近づいた時にあたかも大聖堂の庭にいる気がしたという。ここには死と復活の様相が表されていて、人の命のよみがえりだけでなく、死に絶えるばかりの大聖堂も昔の救済の場として人々に記憶されており、よみがえりの命が予感さ

れるのである。

そして、クリスマスイブから半年が経ち、グチェリーという謎の人物がエドウィン事件の解決に確信を持ったと思われる場面で、大聖堂は次のように描かれる。

「快晴の朝が古い町に微笑みかける。古跡や廃墟では、青々とした蔦が日に輝き、香しい空気の中で豊かな木々がゆらぎ、何にも勝る美しい光景だ。枝が揺れるにつれて変わる輝かしい日光、鳥の歌、庭や森の野原——というよりもむしろ、取り入れの季節になったイギリス全土の耕地という、一つの大きな庭、というべきか——からの香気が、大聖堂の中に忍び込み、その土くさい臭いを鎮め、復活と命を説いている。何世紀も経た冷たい石の墓も温もってくる。建物の中でもっとも厳しい顔をしている大理石の一隅にすら、明るい斑点が飛び込んできて、鳥の羽根のようにひらひら踊っている。(428：下線筆者)

このように周囲の自然の生と大聖堂の死の対比が顕著であった先の描写から一転して、大聖堂の中にも太陽の光、鳥の声、イギリス全土の自然の香りが届き、再び生きた祈りの場となったことが示唆されている。下線部（原文：…preach the Resurrection and the Life）は、「わたしは復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。(ヨハネ 11：25)」というキリスト教信仰の基であるイエスによる死と復活を引用したものであり、大聖堂が再び神の栄光を表す場となることを告げている。

このように、小説の始まりでは、大聖堂は過去の遺物として救いの力はなく、むしろジャスパーの悪を醸成する⁽¹²⁾。しかしそれは、殺人の目撃者として神の裁きを下す場となり、さらには穏やかな秋の一日に命の復活を約束する描写となっていく。無生物に精神を宿らせて描くことの多いディケンズは、この擬人化した大聖堂の変化する姿に、宗教による救いへの希望を描いたと考えられるのである。

おわりに

第一章の終わりに、アヘン窟から大聖堂に戻ったジャスパーの耳に聞こえてくるのは夕べの祈りの「悪人であっても——」という聖書の言葉であった。これは、エゼキエル書 18 章 21 節の聖句で、ディケンズの創作ノートにはこの横に「基調音 (keynote)」と記され、作品全体の重要なテーマであることが示されている⁽¹²⁾。聖書は以下のように続く。

悪人であっても、もし犯したすべての過ちから離れて、わたしの掟をことごとく守り、正義と恵みの業を行うなら、必ず生きる。死ぬことはない。彼の行ったすべての背きは思い起こされることなく、行った正義のゆえに生きる。わたしは悪人の死を喜ぶだろうか、と主なる神は言われる。彼がその道から立ち帰ることによって、生きることを喜ばないだろうか。(エゼキエル書 18：21～23)

これまで述べてきたように、この小説において、クリスパークル氏がネヴィルに諭すのはエゼキエル書の「その道から立ち帰る」ことである。そして、ジャスパーもまた、先に引用したように甥の殺害の後、「何てみともない、哀れな、みじめな姿なんだ！あれはほんものに違いない。おしまいだ！」と叫び、「床の上に泥にまみれた、ぼろぼろの着物の塊」になる姿は、これまでの改悛の情を示さない悪漢とは明らかに違い、カインの物語に喩えられる、人間の罪による神からの追放と赦し、そして死と再生を予測させるものである⁽¹³⁾。

ディケンズが友人のフォースターや挿絵画家のルーク・ファイルズ、そして家族に小説の筋書きの構想を話していたことが知られている。最後の章は、ジャスパーによって獄中で書かれ、自らが行った悪について「他の人について語っているように詳細に語られる」という⁽¹⁴⁾。そこで、回心し、阿片

窟ではなく大聖堂に救いを求めるジャスパーの姿が描かれることになっていたのかどうかはわからない。しかし、たとえ他人事のように話し、回心の言葉がなかったとしても、そこに神の慈愛が注がれる結末を読者に予感させるのは、ちょうど小説の折り返し点にあたる、先に引用した復活を告げる大聖堂の描写が、温かく光に満ちているからである。ディケンズが死の直前に書いていたその個所を、多くの批評家に取り上げて論じているが、ギッシングは、ディケンズが「世間の暗い場所の上を照らす陽の光を見、この現在の状況を超えた何かがあるという希望を抱いていた」⁽⁹⁾と述べている。しかし、大聖堂の比喩を用いることによって、作者はより明確なキリスト教の罪と救いのメッセージを伝えようとしたのではないか。死を前にしたディケンズはジャスパーを通して、キリスト・イエスの示す「復活と命」をたしかに見ていたと思われるのである。

注

- (1) 月刊分冊での連載作品であったため、絶筆となった後の原稿は存在しない。そのため、後半の筋書きを推理する読者や批評家が、当時から後を絶たない。例えば、Felix Aylmer, *The Drood Case* (Rupert Hart-Davis, 1964) ではジャスパーの無罪を仮定し、Peter Rowland, *The Disappearance of Edwin Drood* (St. Martin's Press, 1991) は、ジャスパーを二重人格者として物語の続編を推理している。
- (2) 「ある狂人の手記」は『ピクウィック・クラブ』(1836)の挿話で、「チャールズ二世の時代に語句中で発見された告白書」は週刊雑誌『ハンフリー親方の時計』(1840)に収録されている。
- (3) アヘン窟は実際にロンドンのイーストエンドにあり、ディケンズも探訪に出かけていた。
- (4) Lawrence Frank, 'The Intelligibility of Madness in *Our Mutual Friend* and *The Mystery of Edwin Drood*', *Dickens Studies Annual*, Vol.5, 1976, 182.
- (5) シェイクスピア『マクベス』第一幕第一場の魔女のセリフ「わたしたち三人いつまた会うだろうか」
- (6) Wendy S. Jacobson, "The Genesis of the Last Novel: *The Mystery of Edwin Drood*", *Dickens Studies Annual*, Vol.25, 1996, 207.
ジェイコブソンは、カインとアベルの物語が意識されていた根拠として、

"Where is your nephew?" "Why do you ask me?" というジャスパーとネヴィルのやり取りが、聖書の "Where is Abel thy brother?" "I know not: Am I my brother's keeper?" と呼応していると指摘している。

- (7) チャールズ・キングズリーが提唱した19世紀半ばのキリスト教の運動に名づけられた名称で、クリスパー・クル氏が日々身体を鍛える様子、またパブリックスクール時代のターターとの関係にもその関連が読み取れる。
- (8) カプランは、ディケンズが生涯に亘って興味を持っていた催眠術の力を作品の人物に付与して描いたと論じている。Fred Kaplan, *Dickens and Mesmerism: The Hidden Springs of Fiction*. Princeton UP, 1975, 154.
- (9) ジョン・ミルトン『仮面劇コーマス』菱沼平治訳、丁未出版社、大正5年、(国立国会図書館デジタルコレクション) p.58.
- (10) サレーイは、クリスパー・クル氏を善天使、ミュージックホールの悪者役の名前を与えられたジャスパーを悪天使として対比させていると述べる。また、この作品を宗教色の濃いものと位置づけている。Geoffrey Thurley, *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*, 1976. Routledge & Kegan Paul, 332, 329.
- (11) ホリントンも、クロイスタラムの表面上のリスベクタビリティや正常性の下には奇妙は怪物やグロテスクな人物が増殖している、と述べている。Michael Hollington, *Dickens and the Grotesque*, Barnes and Noble, 1984, 240.
- (12) サンダースも、この基調音が小説全体を表すものであることを意図していたと述べている。Andrew Sanders, *Charles Dickens: Resurrectionist*, Macmillan, 1982, 208-9.
- (13) 例えば、Valentine Cunningham, "Dickens and Christianity" *A Companion to Charles Dickens*, ed. David Paroissen, Blackwell Publishing, 2008, 267. のように、ディケンズの考える罪は犯罪や不道德な行いで、原罪の概念はないと評されることがある。確かに、彼は福音主義の人間の墮落を過度に強調する教義を嫌い、特に『荒涼館』の私生児エスタのように親の罪が子に報いるというという意味で用いられる「原罪」の概念は繰り返し否定してきた。しかし、ディケンズがここで用いたエゼキエル書の一句の直前には、「罪を犯した本人が死ぬのであって、子は父の罪を負わず、父もまた子の罪を負うことはない。正しい人の正しさはその人だけのものであり、悪人の悪もその人だけのものである」(エゼキエル 18:20) とあり、そのような「その人だけの」人間の罪という意味で原罪の概念は持っていたと思われる。引用された「悪人であっても」という言葉の前後を含めて、ディケンズが伝えたい小説の基調音だったのではないだろうか。
- (14) John Forster, *The Life of Charles Dickens* Vol.2, Everyman's Library, 1966, 366.
- (15) ジョージ・ギッシング、小池滋訳『ギッシング選集第5巻 チャールズ・ディ

ケンズ論』秀文インターナショナル、1992、178.

*テキストは Clarendon 版 (1972) を用いたが、日本語の引用は 1977 年講談社から刊行され、1988 年に創元社から出版された小池滋訳を使わせていただいた。必要な最小限の変更を加え、引用の後に創元社版のページ数を記している。なお、同じ小池訳で 2014 年に白水社から出版されている。また、聖書からの引用は日本聖書協会の新共同訳を用いた。

(大阪学院大学短期大学部教授)

キリスト教文藝 第三十七輯

二〇二二(令和3)年十一月十日発行

編集者 「キリスト教文藝」編集委員会

発行者 細川正義

発行所 日本キリスト教文学会関西支部

事務局

〒571-0033 広島市東区牛田東四―1231

広島女学院大学 足立直子研究室内

連絡先 adachi@gaines.hj.ac.jp

印刷所 協和印刷株式会社

〒651-0055 京都市右京区西院清水町1-3

電話 (075) 321-4010

『キリスト教文藝』投稿規定

- 一 日本キリスト教文学会関西支部の機関誌として、会員の意欲的な投稿を歓迎します。支部大会で発表されたものは必ず掲載されることになっております。
- 二 投稿論文は、和文の場合、縦書で、四〇〇字詰原稿用紙三〇枚程度。英文などの場合は、タイプ用紙二〇枚程度(十二ポイント、一枚二五行)でお願いします。
- 三 論文は完全原稿で提出してください(ワープロ原稿の場合はフロッピーなどを添付してください)。
- 四 論文の審査などは編集委員会が行いますが、加筆・訂正などを依頼する場合があります。
- 五 論文の執筆者には印刷費などの費用として一万五千元(十五部買い取り)のご負担をお願いします。
- 六 投稿論文の締切りは毎年四月二十五日です(支部事務局にお送りください)。
- 七 新刊紹介・書評などを会員に依頼することがありますが、その場合は、四〇〇字詰原稿用紙四枚から八枚程度でお願いします。